



丹沢三ノ塔的な風景 (photo AC様より借用)

会員の方々には以前合評会における感想文にて「丹沢を舞台にした小説」の執筆を予告しましたが、一般読者の方々へは当然ながらしていません。そこで、新連載小説掲載にあたり一言、ご挨拶したく一筆啓上とあいなりました。

当同人誌の名称が丹沢の「みなせ(水無瀬)」で発行元の場所が秦野でなかったらば実はこの必要もなかったのです。わたくしこと多谷昇太にとって丹沢は高校生の頃から登っていた思い出深い山脈です。

ヤビツ峠からの表尾根始め焼山からの裏丹沢、鍋割山の白樺尾根、丹沢縦走など、また何よりも沢登りの魅力にしばらく憑りつかれていたものです。そんな私にとって丹沢を舞台にした小説を書くことは自然な成り行きで、今から半世紀前の我青春時代を、疾風怒濤期(だったでしょうか?)の、若きウエルテル的な往時を偲んでの作品となります。ご当地の宣伝となるかあるいはその逆となるか知りませんが、とにかく地元の方々に一筆啓上とした次第です。

(※読者の方々におかれましても、それぞれの青春時代を懐旧していただければ幸いです)

❖ 自らを越えて

多谷 昇太

(一) 影の子の履歴

俺の名前は村田建三郎。近所の者は空手建三郎と呼んでおった。この異名(あだな)は特定の誰かがつけたというわけではなく、いつの間にかそう呼ばれることになったらしい。福岡県に本部道場を持つ京町流空手に心酔し、一時期明けても暮れてもそれにいそしんでいたからだ。この流派は町方、つまり与力・同心が使う十手と沖繩に伝わる釵(さい)を両手にそれぞれ使いながら、同時に空手の手技・足技をからめるといふもので、高段者が演じるその型、つまり劍舞たるや、格闘技のそれと云うよりは洗練された、文字通りなにかの舞いを見るようである。わけあって始めてその流派の川崎支部をたずねた時、ちょうど一人の門弟がその型を演じていた。俺など眼中に入らぬかのように一心に演武するその姿に俺はいっぺんで魅了され、その場で弟子入りを申し込んだものだった。つまり道場生となったわけだ。もつとも釵や十手などを持たされるのははるか先のこ

とで、入門当初からしばらくはもっぱら徒手、文字通りの空の手、すなわち空手の正拳突きや上下段・左右の受けを教わるばかりだった。しかし「強くなりたい」の一心で団地だった我が家の近くにあったガレ場の谷間に棒を立てては正拳突きを繰り返して、果てはまだ教わってもいない廻し蹴りや横蹴りにひたすら勤しんだものだ。それゆえの異名であったわけだが、もつともそう呼ばれる以前はまったく逆の、「末成り(うらなり)」とか「ガリ勉村田」とかいふ180度ちがう異名をつけられてもいた。一人の間で二つも三つも異名をつけられることがあるが、しかしその場合でもそれらは概ね似たり寄つたりのもので、まず俺のような場合は非常にめずらしいのではないか。しかしどうしてそんなことになったかという点、実はそれを述べ行くことで、この小説のプロローグとしたいのである。では以下にそれを記し行こう。

異名が変わるころ、すなわち俺が十六才のころに俺は急にグレ出した。とは云つても街のチンピラのように髪に剃りを入れたり茶髪にしたりといった類のことではない。いやしくも「ガリ勉村田」と呼ばれた手前グレルにしてもずいぶんと、学及的、にグ

れたものである。一応川崎市内の進学校に在籍していた俺はそれまでは以前の異名通りであったのだが、その頃に連続して起こったある二つの出来事を境にしてその異名を変えることとなる。ではいったいなにが起こったのか、逐一記さねばならないがしかしその前に、どうして俺がかくもガリ勉にいそしんだのか、まずそれから云わねばならないだろう。俺には軍隊上がりの怖い父親やら家庭の事情やらというものがあった、その影響で小学校までの俺は至っておとなしく、いまで云うニートの男の子であったのだ。学校では表に出て同級生たちと遊ぶようなこととはせず、もっぱら机にかじりついていて、どうかすれば女の子からもからかわれるような存在だった。家に帰っても近所の同年輩のやつらと遊ぶことはなく、ともだちと云ったら近所のノラ猫やノラ犬だった。声帯模写と云うか猫や犬の鳴き声をまねるのが自分で云うのもなんだが非常に巧みで、そのせいか猫や犬がよくついた。人間とつきあうよりもそちらの方がよほど具合がよかったのだ。ものごころついてからはこんどは読書に親しみ出した。「シートン動物記」やら「十五少年漂流記」などを学校の図書室から借りて来ては夢中になって読んだ。当時の三

種の神器で父親が買って来てくれたテレビが我が家に入ってからニッサンテレビ名画座など欧米系の番組に夢中になる。視力が落ちることなど知らずに読書にテレビに、表に出てはあいも変わらず猫や犬にと、肝心の人づき合いはほとんどしない子供だった。そんな塩梅だったから同級生たちはもっぱら俺にとっては脅威で、男の子からも女の子からもかわれたりいじめられたりしないよう、教室では貝のように固まって自らをガードしていた。そんな俺にとつて一番つらく、脅威だったのが学校の遠足で、その合い間の昼食の時間だった。同級生たちは三々五々仲良し同士でかたまつて食べるのだが、俺には友達など誰もいなかったから皆の目から隠れるようにして一人で食べ、それがまわりからよく目立つので、早く集合の号令がかからないものかとジリジリとしていたものだ。その姿に顕著なように傍目から見たらなにしろおとなしい生徒、わけのわからない、見つともない存在だったのだろうし、そのことをよく自覚していた俺にあっては毎日毎日が自らのインフェリオリティを自覚し続ける、一種精神的な拷問のような日々であったのだ。しかしではなんでそんな性格の子になったかと云うと、俺が3才のころ

に母親が死別し、俺と2つ違いの姉は近所の親戚の
家に行つてはその賄いを受け、果ては遠く奄美大島
の祖父母のもとに送られたりして、はなはだ不安で
ころもとなない幼児期を過ごしたからだだ。その
ころの原体験というか、心象風景が、あたかも放浪
に日々を過ごすのがとき哀愁に充ちたものとなつて、
三つ子の魂百までもではないが以後の俺の性格を形
づくるバックボーンとなつたのだろう。そのバック
ボーンと云うか、心の基盤は、不定形であり定義し
難いものだが、要はいつの間にか自らの核のようにな
つていつまでも存在し続けることとなる。母親の
み胸に帰るように、その不安に充ちた基盤にこそ、
俺は魂のふるさとをいつも見出すようだ。

とにかくそのような体験を経て俺は「人に嫌われ
ないようにしよう」とする、人一倍自分に対する人
の目というものに敏感な子供になつていた。しかし
豈（あに）凶らんやそのように弱弱しく、覇気のな
い性格の自分にあつては、他人から好かれることな
ど土台無理な話で、畢竟前記のごとく「貝のようにな
固まっている」しかなかったわけである。それ加う
るに俺の父親が軍隊帰りの気性の荒い人で、酒乱の
気もあつて、俺はいつも父から叱られないよう、彼

の気に入られようと、ひたすらいい子ぶつていた。
従つて、結論的に云えば俺はいつも受動的でジャス
ト弱く、こちらから他人にどうこうしようなどとは
思いもつかない、影のような子供だったのである。

しかしその影であるということの苦しさも云つたら
云うに云えないもので、そんな俺の小学校時代にい
い思い出などはほとんどない。さて、先に記した「未
成り」「がり勉」という異名出来の事由がここからと
なる。すなわち中学時代からのことで、中学に入学
して初登校の日のこと、編入されたクラスで一人一
人が自己紹介をすることとなつた。名前のアイウエ
オ順に次々と席から立つては自己紹介をして行く。

自分の性格とか得意な科目とかを述べるようにと担
任教師の指示のもと、それぞれが各自各様に自らを
述べて行く。しかしこんな場合誰でも、またどこで
もそうだろうが、誰もが出しゃばり過ぎないように、
皆から浮き立たないように、いたつてそつなく、
簡略に自己紹介をして行くようだ。いよいよ俺の番
となつた。皆にならつてほとんど名前だけを云うく
らに止めようと思ひながら口を開く。どうせまたみ
んなから嫌われること請け合ひの、みつともないカ
ギっ子の口上だ：などと自嘲しながら口を開いたの

だが、しかし…。

「えー、名前はむ、村田と云います。出身校は××小学校で、ぼ、ぼくの性格は…」とぼくとつと語り出す。ところがここで奇跡が起こったのだ。あたかも自分の中に突然別の人格が入り込んだかのごとくに、口が勝手に以下のようなことを告げ始めたのだ。「えー、性格はいたって積極的な方で、人と話すのが大好きです。明るい性格だと思います。得意な科目は社会、音楽…」などと、信じられないようなことを歯切れよいアクセントまでつけて、力強く語りだす。自分で語っているながらその自分の口上を感じ心しながら聞いている俺がいた。こんなことは始めてのことで『おいおい、俺の中の誰かさんよ、勝手にそんなことを云わないでくれよ。俺は決してそんな人間じゃ…』と止めたいくらいだ。あとで実体がわかって笑われるのは俺だからだ。しかし俺の中の誰かは悠然と語り終って俺を席に着かせた。俺の顔は火照って赤くなっていただろう。「えーっ？あいつそんな陽気なやつだったっけ？」とささやく小学校の同級生たちがいたが蓋（げだ）しもつともなことではある。着席直後に俺はもうふだんの俺にもどって『ああ、これからいったいどうなることだろ

う？』と危惧するばかりであった…。

ところが、である。ここからが奇跡だった。へー、あの子（もしくはあいつ）そんな子なんだ。それなら…とばかり、元同学校のやつらはともかく新たに同級となった連中からは一目二目も置かれて接せられることになったのである。あたかも未来の学級委員がクラスの人気者に接するかのように、口もとに笑みを浮かべては、俺の対応如何を探るように接して来る。小学校時代にはまったく云っていいほどクラスメートから話しかけられることなどなかったのだ。それなのにこの変わりようである。どう接していいかわからず、とりあえずこちらも不器用に笑みを浮かべては不慣れな会話を始めるしかなかった。しかしそれが一日二日、三日四日と続くうちにだんだんと馴れて来て、そして板についてくる。なんと云えばいいだろうか、あたかも劇の上である役をおおせつかってそれを始めはぎこちなくても忠実に演じるうちにそれがさまになってくる、といった塩梅だった。そうすると不思議なものでいままで悉皆自分にはないと思っていた社交性と云うか、ゲーテの云う親和力なるものが俺の内にも感じられるようになって来て、畢竟万事がうまくまわり出したのであ

る！どうせ俺なんてとすべてにおいてC調していた俺は勉強もはかどらず、姉と比べれば成績は見るも無残だった。5段階通知（※昔の通知表は5段階で評価されていたのです）のそれはほとんどが3と2ばかりで、5ばかりだった姉のはるか後塵を踏んでいた。それが万事における身のまわりの好転を得ると、なんと成績までもが上がり出したのである。つまり家に帰ってからの予習・復習に自然に励むようになって行った。俗に云う「やる気が出て来た」というわけだ。このあたりの塩梅を、俺は俺なりにぜひつまびらかにしてみたい。そこには二点の要素が考えられて、まずその一点から記す。少し昔のCMで「こんにちは、ん、さようなら、ん。魔法の言葉で楽しい仲間（なつかま）が、ん」という語尾に独特のイントネーションを持った女性歌手の歌うものがあつたが、おそらくこの展開だったのではないか。つまり前記の自己紹介における俺の言葉が「魔法の言葉」だったわけだ。もしくは「始めに構えあり」という言葉があるがこれを地で行ったのだとも思う。空手でも柔道でもあるいは書道でもそれを始めるに当たっては姿勢というものがある。みずからを鼓舞するという意味で使われるのだろうか、しか

しこれは他人に示す、言葉は悪いが威嚇するという意味でも結構（どころかかなり）効くということだ。実際は単なるハツタリなのかも知れないがその構えによつて見る者が萎縮し、相手を過大評価してしまうわけだ。この類のことが俺の身に起きたということである。もつともそんなものは文字通りハツタリですぐに化けの皮をはがされるだろうと人は思うだろうが、事と次第によつてはそうでもない。さきほどの「始めに構えあり」で、いったん壮言大語したことをみずからへの指針とするか、あるいは頂いた役どころと心得て、それを演じようとするならばそのまま通つてしまうことだつてあるのだ。俺がいい例だ。なにしろ中学校での三年間をそれで通してしまつたのだから。とにかくそれが一点で、では他の一点だがこちらの方ははたしてそのまま読者に受け入れてもらえるかどうか甚だ心もとない。と云うのも話がいたつてオカルト的になるからである。どういうことか：とにかく書いてみる。いきなりだが皆さんは守護・指導霊ということを、その言葉を知っているだろうか。人間各自の背後にあつてその人を守護したり指導したりする霊のことで、その存在を本人が普段から感知することはないし、できないと

云われている。しかし自覚せずとも普段にその助けや働きを受けているのだそうである。前に自己紹介の折りに「俺の中の誰かが」と書いたがこの時の、誰か、がその守護霊なのではないか：と思う次第なのである。そういうわけは、自分でしゃべっていながら自分ではないような気がしたからだし、何よりも自分の豹変ぶりが信じられなかったからだ。すればその正体は守護霊か、あるいは何かの憑依のたぐい？と思うしかないではないか。ただもつともそう思うに至ったのはその時ではなく、それよりはるか未来のことで、当時は守護・指導霊などという言葉さえも知らなかった。小説冒頭の紹介文に掲げた「折々の高見に立つてこそ越し方が見える。わかる」という時点から俺は今これを書いている。いまの俺の年令は聞くなかれ、だ。なにせ気ばかりでも往時に戻って書いているのだから、ひとつお許し願いたい：。ともかく、この守護霊様か指導霊様か知らないがその折り同様にこれ以後も何回かこの小説に登場することとなる。もつとも「わしが守護霊じゃあ」などと云って出て来るわけでは全然なくて、このとき同様にみずからの全きカオスの内に突然出現するのだが：。ただ、ちよつとここで書き添えたいのは、

そもそもこれがはたして本当に守護霊なのかどうか、実は断言できないということである。先に憑依のたぐいかも？と書いたことで、守護霊なら善霊だが憑依となると必ずしもそうは云えなくなる。憑きものと云うか、憑かれもの体質のようなところが俺にはあるようで、仔細は省くが小学校時代からごくまれに人格が急変することがあったのだ。これ以上はなく切羽詰まったとき、もはや状況に我慢できなくなつたとき：など、ごくごくまれにそれが起きた。日頃の鬱状態から躁に人格が急変するのだ。ただそれは中学校での自己紹介時のように自分でも驚くほどのはつきりとした、また系統だつた論理性まで感じさせるほどのものではなく、いたつて気分的なもの、幼かつたこともありそれほど気にもしていなかつた次第。であるから、はたしてこれが躁鬱病・多重人格症のたぐいなのか、それとも守護霊であるのか、まったく判定が行かない。恐れ入る話だがこれ以後の小説の然るべき場面でその表出を描くので、どうか読者の方々の側でご判断いただきたい：。

さて、中学校時代のことであらう長居をしてしまつた。冒頭のグレルきつかけとなつた事件へと、高校生時代へと進まねばならない。ともかく結論的に

云えるのは、このあとの中学校生活に於いては姉のように学級委員とまでは行かなかったが、クラスの何かの役員に選ばれさえもして、友人も何人も出来て、それまでの俺であれば考えられないほどの、充実した日々を過ごし得たということだ（悲惨だった遠足での光景も雲散霧消した）。

で、問題の高校時代へと移るのだが、勉学の甲斐あつて俺は川崎市内の（二応）進学校へと進み得た。ところが俺はここでボタンの掛け違いを仕出かしてしまうこととなる。中学校での成功体験をそのまま踏襲する上において、肝心なことを失念もしていたのだった。それは何かというと「勉強ができれば、成績が良ければ、みんなから相手にしてもらえ、認めてもらえる」ということで、しかしこれは主客転倒の、順序を取り違えた思い込みでしかなかったのである。勉強が出来たから友人が出来、まわりの環境も良くなって、自分の性格も明るくなった：：のではなく、事實はまったく逆で、（当初は演技であつても）自分発の積極性がまず有り、そこに友人が出来て環境が好転し、その結果勉学にもやる気が起き、成績が上がった：：というのが正解だつた。そのことと、さらにいま一つ、本来年令とともに生ずべき、

また育むべき重要なことにまったく思いが行つていなかった。それは何かというと一言で云えば「自分本位」か「他人指向」かということであり、それが云い過ぎであれば「自分のことばかりしか考えてない」か「他人に目が行き、思いやれる」かと表現してもいいが、とにかくそのことである。幼児であれば100%、小学生であれば80%、中学に至れば60%という具合に減らして行く、あるいは自然の内に減少すべき「自分がすべて」もしくは「すべてにおいて自分が優先」指向を減らし行くことに、まったくと云つていいほど俺は目が行つていなかった。そこには中学時代の劇的な成功体験があり、その裏返しのような幼児と小学時代の悲惨さとうっ屈があつたのだが、それにしてもそこでプラマイの帳尻を合わせただけで、前記・他人指向へと少しでも進み得なかつたのは、これひとえに自責に帰すと云うほかはない。またそれ加えるにちやうどこの時期家が転居して、それまで親しくしていた中学時代の友人たちと皆別れ別れになつてしまったことも大きかつた。それまで母が何回も申し込んでいた市営団地入居が川崎市内の北部に決まり、同市南部に幼児から居住していた俺は友人たちと同じ学校に進学で

きなくなってしまうのだ。北部と南部では学区が異なるのだそうである。しかしそうすると畢竟中学

入学時の再現となってしまう、中学時の友人たちが一人もいない、全員がストレンジャーばかりの中で俺は再び自らをアピールせねばならなくなった。ところがここで前記したボタンの掛け違いや、自分のことばかりに目が行くという悪癖が出て、結局否定なしに、小学時代の孤独という蟻地獄の中に、再び三度俺は沈み行くこととなってしまうのだ。「自分のことばかり」というのは「自分が他人からどう見られてるか」「嫌われていないか」「他人の目にみつともなく映っていないか」などという幼児・小学生時分から育成して来た、自らの心の基盤であることは云うまでもないが、俺の場合とはかくそれが過ぎるようなのだ。これが他人の目には好意の強要と映り、幾許もなく「疲れるやつ」となり、仕舞いには「他人の眼ばかりを気にしている臆病者め」とでもされて、弾かれるに至るわけである。しかしそうなったらそうなたで俺は畢竟萎縮し、いじけて、挙句自棄にもなってしまう。すなわち自らを（これを敢て換言すれば「他人との関わり」を）放棄してしまいがちになる。もがけばもがくほど深みにはま

ってしまうという蟻地獄、つまりは自らの内における悪循環の中に落ちてしまったのだった…。

さて、ここらあたりでようやく冒頭の、異名が180度変わってしまった由来に、このころ起きた二つの出来事の述懐へと戻れるようだ。すなわちボタンの掛け違いを必死になつて仕出かしていた時分のエピソードへと。これを以下に章を変えて執筆しよう。

（―続く―）

「※歌集等で恥ずかしながらご紹介した特別な厄禍が私には常にありまして（ストーリーカ―らによる睡眠妨害）、為にどの小説であれ連載が続きません。身体がきついのです。ですから畢竟、随意形式とならざるを得ないことをお詫び、且つお断り申し上げておきます。悪しからずお含み置きくださいませ」